田中芳男と南信州伝統野菜を語りつなげるプロジェクト

関口　真紀
飯田市立中央図書館

１　はじめに

1-1　飯田市の現状と課題

飯田市は、長野県の最南端の市で、人口は令和 6 年（2024）4 月末現在で 95,463 人[1]、東西に南アルプスと中央アルプスに囲まれ、南北に天竜川が流れる自然豊かな街である。高等教育機関が少なく高校卒業後約 70%がこの地を離れ[2]、「地元を離れた若者が帰ってこない」という課題が長年に渡り圧し掛かっている。進学した若者が地元に戻って就職する割合は約 20%である。また主産業である農業においても、担い手不足という課題がある。飯田市は地形的特徴から小規模農家が多く、兼業農家が多い。小規模農家単独では、農機具の確保や技術の継承は難しい。近年は物価高、地球温暖化対応など社会経済環境が大きく変化しており、地域農業の振興や地産地消による地域内経済循環の推進は必要不可欠となっている[3]。また、みなみ信州農業協同組合によると、農産物の直売所の売上は伸びてきており[4]地元農産物に地域のニーズが高まってきている。

1-2　郷土の先人、田中芳男の思想

日本の農業振興において、飯田市出身の田中芳男の功績は大きい。田中芳男は、江戸幕府と明治政府に仕えた役人で、1867 年と 1873 年に開催されたパリとウィーンの万国博覧会にて日本の出品に貢献、後に国立科学博物館や東京国立博物館の館長を務めた。博物学者であるとともに農学者でもあり、明治期に外国から入ってきた白菜やアスパラガス、リンゴなどの産物の普及をはかるとともに、日本の伝統的な技術や知恵を掘り起こすという業績を残した。著作である『有用植物図説』や『教草』にその業績を見ることができる。大日本農会の結成にも参画している。田中芳男の思想は、「自然界の資源をいかに有効に利用して万民を豊かにするか」が目的であった[5]。

飯田市の農業を支えている事業所、みなみ信州農業協同組合の学習会で田中芳男が取り上げられ、学習の成果が飯田市役所に展示されていたことがあった。その展示を見たとき、田中芳男の文献は図書館にたくさんあるのに使われていないことを残念に感じた。「市民にとって図書館で調べることをもっと身近なものにしたい」と強く思った出来事であった。

そこで飯田市の現状と課題に対し、今回の BL 講習会で学んだことを糧に、郷土の先人田中芳男の思想にもヒントを得て、「市民にとって図書館で調べることをもっと身近にする」飯田市立中央図書館のビジネス支援の取組を提案する。

2　提案事業「田中芳男と南信州伝統野菜を語りつながるプロジェクト」

地元農産物直売所へのニーズの高まりを受け、提案の基軸を野菜とする。飯田市と下伊那郡を含む南信州地域は、伝統野菜が多い。伝統野菜は農産物直売所やスーパーの産直コーナーで季節になると購入できるもので、いつも購入できる野菜ではないため広く知られているとは言えない。田中芳男は、「日本の博物館の父」と言われ[6]、万国博覧会に関わっただけでなく、国内でも「殖産興業」のための博覧会を勧めている。そこで、本や情報がある図書館に伝統野菜の現物や写真を展示し、地域資源である伝統野菜を広く知ってもらう「南信州伝統野菜博覧会」（以下「博覧会」という）を実行委員会形式で開催する。博覧会は年１回２週間の期間を設け３年間継続して開催し、博覧会期間中には、伝統野菜マルシェ、野菜を語る会、農業情報探索講座、就農相談会など野菜に関する様々な関連講座を行う。その記録を『南信州伝統野菜図録』にまとめて刊行する。その図録を販売し、さらに伝統野菜を広める。この活動を「田中芳男と南信州伝統野菜を語りつながるプロジェクト」と名付ける。

3　プロジェクトの目的と対象者

「田中芳男と南信州伝統野菜を語りつながるプロジェクト」の目的は、大きく４つある。

① あまり知られていない伝統野菜を、図書館が幅広い世代が利用する場であること活かして広く PR、特に高校生等若い世代に伝え、地産地消の意識や地域の農業への意識を高める。

② 本や情報がある図書館で「博覧会」を行い、「博覧会」に参加し興味をもった人が興味をもったときにすぐに関連情報を調べることができることで、図書館で調べることを身近にする。

③ 伝統野菜から地域の気候、風土、食文化を学び、博覧会の「図録」を発行することで次世代に継承する記録を残す。

④ 田中芳男の功績を現代に生かし、伝統野菜を知り交流する場をつくることで、農家の悩みや課題をプロジェクトで共有し、学習交流や人のつながりで課題解決の糸口を見つけ、地域の農業を支える。

プロジェクトの対象者は、地域の農家の方や農業に興味がある人たち、高校生・大学生など若い世代、野菜が好きで魅力を伝えたいと思っている人たちである。

4　事業の具体的内容と連携先

まず、飯田市農業課を通し、みなみ信州農業協同組合、南信州地産地消推進協議会[7]、伝統野菜農家に協力をお願いし、プロジェクトメンバーを募集する。高校の探究学習に関わっている公民館主事から高校へ呼びかけてもらうほか、飯田市企画課から信州大学農学部にも呼びかけを行う。飯田市美術博物館には、田中芳男の紹介について協力を得る。

伝統野菜農家には、博覧会に展示する伝統野菜を提供していただいたり、栽培の過程を写真に記録したりしていただく。他のプロジェクトメンバーは図書館で調査しながら伝統野菜の展示パネルを作成、高校生や大学生は展示パネル作成補助や展示作業の補助、「博覧会」受付の補助、広報のためのチラシ・ポスターづくりなどでかかわってもらう。取材として、伝統野菜の畑へ行って農家の話を聞く、田中芳男ゆかりの地を巡るなどしてプロジェクト内の親睦を深めたい。

１年目の「博覧会」期間中は、出品された生産者の野菜自慢トークショー、野菜料理をとことん語る会、など並べられた伝統野菜の中で参加者が野菜について気楽に語る場をつくる。語る場の中で、司書が農業の本を紹介したり、語り手に本を紹介してもらったりする。伝統野菜マルシェも行い、興味を持った方が購入できるようにすることも地産地消の点で必要である。

２年目の「博覧会」は、１年目に継続して野菜を語るイベントを行うほか、農業課の協力を得て就農相談や農家の情報交換会、高校生と農家の交流会などを行う。

３年目の「博覧会」は、伝統野菜や野菜のタネを学ぶ講演会、地産地消を考える会などを南信州地産地消推進協議会との共催で行う。そして、今までの「博覧会」の記録をもとに『南信州伝統野菜図録』を刊行する。刊行には長野県の補助金[8]を利用する。この『南信州伝統野菜図録』を刊行することで、プロジェクトの成果は誰もが目に見える形となるのである。

『南信州伝統野菜図録』は図書館で貸出を行うほか、図書館、書店、農産物直売所で販売する。東京アンテナショップでの販売やふるさと納税の返礼品に入れると、地域外への広報も期待できそうだ。完売を目指していくとともに、４年目の「博覧会」に向け、『南信州伝統野菜図録』をテキストに学習交流を行うなど、プロジェクトの活動は続いていく。

「博覧会」の１年目は親しみやすいイベントで図書館利用者へ広報し、年を重ねるごとに協力いただく農家や農業関係団体の輪を大きくしていくことを目指す。大事にしたいのは、図書館は情報提供の場であることを多くの方に認識していただくことと、集まった人たちが学習交流でつながりをつくるということの２点である。

５　期待される効果

南信州の伝統野菜を広める「博覧会」の開催、その記録である『南信州伝統野菜図録』の刊行によって、幅広い世代に地域資源である伝統野菜の存在を知ってもらうことができる。地域産の野菜に注目が集まり、地産地消の意識を高めることができるだろう。また、『南信州伝統野菜図録』を図書館で保存・貸出することで、南信州伝統野菜は次世代に継承される。『南信州伝統野菜図録』の販売は、「完売する」というプロジェクトの新たな目標ができ、４年目以降も「博覧会」を継続させるモチベーションにつながるだろう。４年目以降、「博覧会」開催の中で、『南信州伝統野菜図録』をもとに伝統野菜トークライブ、

地域の風土と産業を学ぶパネルディスカッション等学習交流を大事にしたイベントを行い、図書館は図書・情報提供と場所の提供を行う。プロジェクトメンバーは、伝統野菜農家など農業関係者、高校生・大学生だけでなく、だんだんに輪を広げ、野菜を料理する主婦、料理人、飲食店経営者、野菜の加工業者、野菜ソムリエ、タネ業者、農業高校の先生など野菜に関わる様々な立場の方を巻き込む。野菜に関わる多角的な立場の方が学習交流でつながると、地域の農業を支える大きな力になると考える。プロジェクトメンバーの学生は進学で地域の外に出ても、プロジェクトメンバーと活動がしたくて「博覧会」時には帰省する人や、「将来は伝統野菜を作りたい」、「伝統野菜を研究したい」という人が現れるのではないだろうか。それは地元に帰ってきて就職する若者を増やす一助になると期待できる。図書館はプロジェクトをきっかけに様々な立場の方とつながり、コミュニケーションから課題を把握し、課題に応じた図書の収集・提供、関連機関の紹介などの情報提供と学習交流のハブの役目をしっかり果たしていきたい。

6　おわりに

飯田市立中央図書館では平成 18 年度（2006 年度）からビジネス支援を始め、企業や農家とコラボして野菜のブックカバーで有機野菜を PR したり、焼肉文化を紹介する展示を行ったりしてきた。また飯田市では現在、山も里も街もあり多様な暮らしを選択できるオーダーメイド型移住支援、手厚い就農サポート、「人口 1 万人に対する焼肉店数日本一」というユニークな食文化を打ち出し、地域づくりを支えている[9]。宝島社刊行の『田舎暮らしの本』2024 年 2 月号によると、「住みたい田舎」ベストランキングで飯田市は、人口 5 万人以上 10 万人未満の市の中で、「若者世代・単身者部門」と「子育て世代部門」で 1 位を獲得した。

飯田市のまちづくりの合言葉に「ムトス」がある。「～せむとす」を引用した造語で「～しようとする」行動への意思や意欲を表す言葉だ[10]。飯田市立中央図書館でもこの「ムトス」の精神で人と人とのつながり・支え合いを大事にビジネス支援の取組を飯田市の産業支援の輪の中で進めていきたい。

最後に、大きな学びをくださった BL 講習会の講師・アドバイザーの皆様と事務局の皆様、一緒に切磋琢磨した受講生の皆様、特に 3 班の仲間に心から感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

1　飯田市ウェブサイト https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/5/setaisuu-jinkou.html（2024.5.28 閲覧）

2　飯田市「いいだ未来デザイン 2028」

https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/61106.pdf（2024.5.28 閲覧）

[3] 飯田市産業経済部「地域経済活性化プログラム 2023」
https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/60366.pdf（2024.3.11.閲覧）
高校卒業生・大学進学者等の地元就職割合や、飯田市の農業の課題が示されている。

[4] みなみ信州農業協同組合　ディスクロージャー誌「JA みなみ信州の現況　令和４年度」
https://mp.znote.jp/zdeX4Es/api/v1/files/zfiles/6b92cb7d953735d593c36566bb79f5657d4fe83b-1695870730069.pdf（2024.3.11.閲覧）

[5] 長野県立歴史館『田中芳男―「虫捕御用」の明治維新』2017 年

[6] 飯田市美術博物館『日本の博物館の父　田中芳男』1999 年

[7] 南信州地産地消推進協議会 https://minamishinshu-products.com/（2024.3.11.閲覧）
みなみ信州農業協同組合、飯田商工会議所、飯伊調理師会、長野県南信州地域振興局（商工観光課、農業農村支援センター）、飯田市（産業経済部農業課、商業観光課）、株式会社南信州観光公社などがつながり、飯田市・下伊那郡地域を含めた南信州産の農畜産物及び地域の食文化を広く発信し、地元農畜産物による食を提供するための生産・流通・サービス・消費のシステムを確立すること、地産地消による経済循環を高めて、持続可能な地域づくりに貢献することなどを目的としている。

[8] 長野県地域発元気づくり支援金
https://www.pref.nagano.lg.jp/shinko/kensei/shichoson/shinko/shienkin/index.html
（2024.5.28.閲覧）

[9] 飯田市広報ブランド推進課『飯田 PRESENTS』2022 年

[10] 飯田市「いいだ未来デザイン 2028」[2]の再掲